

ベケット、明日なき真実

堀 田 敏 幸

一、ゴドーとは誰か

ベケットの戯曲『ゴドーを待ちながら』（一九五二年）は、ゴドーという人物が来るのを二人の浮浪者が待つという、極めて簡明な構成を取っている。しかし、その中心となるゴドーが舞台上に姿を現わさないために、この作品は謎めいた雰囲気随所に作り出している。ゴドーとは一体、何者であるのか。勿論、人間であることは確かなのであろう。ウラジミールは田舎道の木が一本立っている場所へ、彼がやって来ることになっていると言う。ただし、そう言う彼にとっても、ゴドーが本当に来ると約束したのかどうかとなると、「確かにやって来ると言ったわけじゃあない⁽¹⁾」とばかりに確信が持てなくなる。それでは、ウラジミールはゴドーなる人物に実際に会って、何か言葉を交わしたのだろうか。来る約束はしなかったとしても、ゴドーがその場所へ来る予定があるというような話を聞き出したのであろうか。またそもそも、ウラジミールはゴドーなる人物と出会っていたのであろうか。ゴドーの外見や言動といったものは、ウラジミールからは語られていないのである。

「ゴドーさんが今晩は来られないけれど、明日はきつと行くと伝えるように⁽²⁾って」と言いに来たのは、ゴドーのところで働いている少年であ

る。ウラジミールはこの少年から、彼が山羊の番をしていて兄と一緒に働いていること、主人が食べ物で沢山くれ、この少年には優しいことなどを聞きだす。そして次の日にも少年がやって来て、ゴドーは来られないと告げる。しかし、この少年は昨日の人物ではなく、伝言に来たのは初めてだと言う。この別の少年から、ウラジミールはゴドーが仕事は何もせず、白髪であることを聞きだす。これだけの情報からすると、ゴドーなる人物が人間であることは間違いないように考えられる。そして、二日目もやって来ないゴドーに対して、ウラジミールとエストラゴンはまだ明日も彼を待つべきかどうか思案する。

エストラゴン： それじゃあ、すっぽかしてやったらどうだろう。すっぽかしてやったら。

ウラジミール： あとで、ひどい目に合わされる。⁽³⁾

二人は昨日も今日もやって来なかったゴドーに対し、三日目は自分たちの方から来るのを中止したらどうかと考える。これに対し、ウラジミールの方はゴドーから復讐されるのではないかと恐れる。なぜ二人は、二日間来なかったゴドーを恐れる必要があるのだろうか。彼らはゴドーに対し明確な約束をした訳でもなければ、また何らかの債務なり恩義を彼に負っている訳でもない。二人の方から進んでゴドーに会いに来る必然性は、何もないのである。しかし、彼らは自分たちの方からゴドーを迎えるのが、道理だと考えている。一体何ゆえに、ウラジミールとエストラゴンはゴドーに会う必要があるのか。この会話のあと、舞台背景としてある一本の木で首をつることに考えが及ぶ。なぜゴドーに二日間会えなかっただけで、自殺まで思案してしまうのか。本当にゴドーというのは実在の人間であるのか。これが恋人同士であるなら、逢瀬^{おうせ}がままならぬために死を考えるというのはよく聞く話である。ところが、この二

人にとってゴドーとは、ウラジミールによれば、今までに一度会ったという程度の人物にすぎない。そういう人物に再会できないという理由だけで、自殺へと追い込まれる必要はないであろう。

ゴドーとは確かに人間であるのかもしれない。ただし、ウラジミールとエストラゴンが自殺を考えようとするのは、ゴドーが原因であると判断できる根拠は何もないのである。エストラゴンはかつて川に身投げをしたことがあると言うし、この劇が始まって早々に、二人は首をつる話に興じる。体重の軽い人間が首をつれば、木の枝は折れず死を迎える。一方、重い人間が行えば、枝は折れて自殺は失敗に終わり生き延びる。このような道化めいた会話であるが、この『ゴドーを待ちながら』の作中では、絶えず自殺への誘惑が二人に起こってくる。従って、ゴドーがやって来るかどうかの如何に関わらず、二人は自殺への機会をうかがっている。ゴドーの来訪がないことは彼らにとって自殺への一つの切っ掛けにすぎず、来訪が叶ったとして、彼らが絶対に自殺しないという根拠は見出せないのである。

二人の方から来訪を中止した場合、なぜ彼らは「ひどい目」に合うのか。それは彼らがゴドーの来訪を待つことによって、彼らの自殺を延期させているという暗黙の思念が働いているからであろう。彼らの自殺という悲劇に対して、ゴドーの来訪は一時的にもせよ希望として作用している。どんな事柄にせよ期待があるところには、希望が輝いて見えるものだ。従って、彼ら自身が来訪するのを中止した場合、ゴドーに対する希望が消滅することを意味する。希望を失った人間は、彼らの悲劇的目標である自殺へと駆り立てられることになるであろう。そうなれば、彼らの願うところとはいえ、自殺がゴドーからの復讐として決行されたことを結果的に意味する。この死は罰であるに違いない。彼らは来訪を拒絶することによって、死の罰を受けることになる。

これまで彼らは何度も自殺を試み、その都度、失敗を繰り返した。た

とえ今回もこの罰が失敗に終わるとしても、別の復讐が待ち構えているかもしれない。それはウラジミールとエストラゴンに対する直接的な罰として劇中で描かれるのではなく、ポゾーとラッキーという二人の通りがかりの人物を通して語られる。ポゾーは主人として、召使いのラッキーをまるで牛馬のように扱う。主人は手に鞭を持ち、召使いは重いトラUNKを持たされ、首に綱を掛けられている。こうした状況の二人連れは、姿を見せないゴドーとは対照的に、一日目もそして二日目もウラジミールとエストラゴンの前に現れる。ところが、二日目は二人の状態が変化していて、ポゾーは盲に、ラッキーは啞になっている。なぜこのような病状になったのか、その理由は語られない。理由の明示のないところが、当人だけの原因によるのではないことを暗示しているであろう。通りがかりの通行人が、理由もなく大きな不幸を背負う。これは、この劇作品の主人公たちにも通用する不運であることを示唆する。それは主人公の二人が、自分たちの方からゴドーを迎えに来なかった場合に受けることになる罰を告げている。ウラジミールもエストラゴンも、通行人の二人と同様に盲になり啞になるのだと。

待ち人ゴドーは現れない。待つ身の二人は待つことを中止しようと思いはするが、罰を恐れて実行できない。待ち人が来訪しないことは、彼らの自殺への願望が延期されることをまた意味する。彼らは待つという空白化した時間の中で、自分たちの状況をいろいろと空想する。

ウラジミール： でも、靴なしの裸足^{はだし}じゃ歩けないだろう。

エストラゴン： キリストはそうしたさ。

ウラジミール： キリスト！ そりゃ、どうい^うつもりなんだい。いくらなんでも、自分をキリストとおんなじように考えているんじゃないだろうね。

エストラゴン： 俺は一生、自分をキリストとおんなじように考えて

きたさ。

ウラジミール： だが、そりゃ、暑い国のことだぜ、暖かい国の！

エストラゴン： そうだな、それからじきと礫^{はりつけ}にされたんだ。⁽⁴⁾

エストラゴンの靴は小さすぎて、履^はけば痛くなるため裸足で歩くと言う。この裸足のことからキリストへと話が飛躍する訳だが、彼は裸足で歩くことがキリストと同じだという状況を更に飛び越えて、「自分をキリストとおんなじように考える」と言う。ウラジミールの方は単に裸足の状態を問題にしているのに対し、エストラゴンの方はキリストの生涯と自分を比較しようとしている。キリストの殉教の生き方と彼の自殺への意志とが、同一であることを訴えている。エストラゴンは、かつて川への投身自殺を図ったことがあった。そして現在にあっても、後ろに生えている木で縊^{いし}死しようという誘惑に駆られる。なぜ、彼は自ら死の道を選ぼうとするのか。その直接的理由は語られない。しかし、彼は生存に対して絶望的なまでに不安に捕えられている。彼の生きがいは何なのか。地獄へと堕ちないことなのか。でもその前に死なないことには、天国への道も地獄への道も定まらない。勿論、死ぬ前に善行を積むことによって、天国への道も開かれる。しかし、善行以上に彼は生の不安に捕えられ、今や希望の光、ゴドーの来訪を待っている。

ゴドーはキリストであるのか、それとも死自体であるのか。キリストであるなら、エストラゴンは待つことによっていずれ救われるであろう。なぜなら、彼はキリストと同じように殉教の道を選ぼうとしているし、この聖者の来訪しないことに不安をかかえ、苦悶の中に置かれているからである。「神は苦しむものをその苦しみによって救い、苦痛によって耳を開かれる⁽⁵⁾」と、『旧約聖書』の「ヨブの書」は言う。だが、エストラゴンは救われる程に十分に苦しんだであろうか。それは分らない。なぜなら、苦しみはその分量や時間によって判断される訳ではないから

である。彼は自分の考えとしては、キリストにも匹敵する程の苦痛の中にあつて自ら命を絶つことも辞さないし、死への誘惑にも駆られている。靴を履かない裸足の彼は、殉教へと進むキリストに続く者と思える。しかし、彼にはそれに相応しい死は訪れない。彼は機縁が熟すのを待たなければならない。彼の待つゴドーとはキリストであるのか神であるのか、それとも神へと通じる死であるのか。苦しみの中にあつて、彼の待機にはその完了する時を見出せない。

二、明日なき真実

ゴドーは姿を現わさない。来ることを使者の伝言により予告するだけである。現れるはずの者が現れない。これは小説『ワット』(一九五三年)の登場人物、ノット氏に似たところがある。彼は一人で大きな屋敷に住んでいる。そこには彼の世話をする召使いが二人雇われている。ところが、主人のノット氏は自分の召使いに対しても、姿をあからさまに見せようとはしない。毎日のように態度も声も匂いも髪型も違っていて、ある日には背が高くて青白い顔付きかと思うと、別の日には背が低く赤ら顔というように、離れた位置からは見えたりする。話したり笑ったりする声もまともに聞いたことがないと、召使いのワットは言う。ノット氏は自分の家にいながら、空虚な沈黙と闇の気配の中で生活している。そして、ワットはノット氏が何も必要とは思わないが、その「何も必要としないこと⁽⁶⁾の証明となるものを必要」としている⁽⁶⁾と考える。何も必要としない者は、その存在を他人に見せようとし⁽⁶⁾ない。ただ影のような存在として生存していることを他人に認知してもらえば、それで十分である。ノット氏はその存在感を徐々に消去してい⁽⁶⁾くだろう、最後にはノットという名前だけが他人の記憶に残る存在として。

名前だけの存在、それはつまりゴドーのことではないのか。彼は自分のところで働いている少年に、今日は来れないと伝えさせる。彼は仕事をせず白髪だということを、少年は打ち明ける。しかしそれ以上には、ゴドーが何者なのかは分からない。ウラジミールとエストラゴンがなぜ二日も続けて彼を待たなければならないのか、その理由は何も知らされない。ゴドーは、ノット氏以上に秘密にされた謎の人物である。もしノット氏が家にも住まず少量の食事を取らず、ただ召使いの話の中にだけ登場する人物であれば、十分に彼はゴドーの代役に成り得るかもしれないのである。名前だけの存在であれば、ゴドーがウラジミールとエストラゴンにとって希望と恐怖の対象となっているように、ノット氏もワットの理想像として幻影化されるであろう。名前だけの存在とは、不在者に最も相応しい全能の存在様式であるに違いない。

戯曲『ゴドーを待ちながら』には、不在者ゴドーと仙人のようなノット氏の類似以上に、小説『ワット』とよく似た価値観が語られる箇所がある。

ウラジミール： 私は眠ってたんだろうか、他人が苦しんでるあいだ？ 今も眠ってるんだろうか？ 明日、目が覚めたとき、今日のことを何と思うだろう？ 友だちのエストラゴンと、この場所で日の暮れるまで、ゴドーを待ったって？ ポゾーがお供を連れて通りすぎた、そして我々に話しかけたって？ 多分、そうだろう。⁽⁷⁾しかし、その中にどれ程の真実があるんだ？

「ゴドーを待った、ポゾーが話しかけてきた、その中にどれ程の真実があるんだ？」と、ウラジミールは問いかける。ゴドーを待つ、これはウラジミールとエストラゴンにとって、自分たちの救世主となるべき人

物と出会うことではないのか。そのために、彼らは二日続けて待っている。ポゾーが召使いのラッキーと通りかかった。主人は思いついたことを勝手にわめき立てるラッキーを、鞭を持って牛馬のように扱う。主人のポゾーは言う、「いいかね、私があいつの立場に、そしてあいつが私の立場になっていたかもしれない。めぐり合わせが反対になっていたらね。それぞれの運命でな」⁽⁸⁾。主人と召使いの境遇は「めぐり合わせ」でそうになっているだけであり、ラッキーへの冷遇はポゾーの^せい^いの所為ではないと、主人のポゾーは訴える。こうした過去の言動に対して、ウラジミールは「どれ程の真実がある？」と自問する。

なぜ、過去の事実が「真実」でなくなってしまうのだろうか。過去の行為は確かに実行された。しかし、その過去の事実が現在の状態において、何らかの有意味をになっていないのである。ウラジミールはエストラゴンと一緒にゴドーを待った。しかし、待つという行為は、当の目的の人物が来訪しないことには意味を持たない。無駄に帰した待機は、かえって待つ身の人物を憂鬱と不安の中へ落し入れる。待機が未来の幸運をもたらさなかった以上、それは何の価値も生み出さず、ひいては待機自体の価値が疑問に付されることになる。待機には何の真実もなく、ただの徒労であったと。一方、通りかかったポゾーとラッキーも、ウラジミールにとっては肝心の待ち人ではなかった。エストラゴンがひょっとしたらポゾーがそのゴドーではないかと思いつくが、ウラジミールは確信をもって否定する。ポゾーは単に通りかかっただけの人物であり、彼らは去っていき、ウラジミールとエストラゴンは孤独の中に残される。ポゾーが話しかけてきたことは、二人の待機にとって何の進展も為さなかった。それらは単に待つ時間の空白を、わずかに人間の言動で塗りつぶしただけの暇つぶしに終わった。一体ゴドーを待つことに対して、これらの行為が何の意味を持つというのであろうか。ゴドーに会うことが真実を意味するなら、それを待ち続け暇つぶしをすることは、その真実

への失望の証となる。

過去の事実が無に帰する。これは待つ間の言動を無駄に浪費する、『ゴドーを待ちながら』の主人公たちに該当するだけではない。先に小説『ワット』の中の副人物ノット氏は、その無為な生活と存在の不可解さのために、姿を見せないゴドーと類似する人物であることを述べたが、主人公のワットの方はウラジミールと共通する部分を多分に持っている。ワットはノット氏の屋敷に召使いとして雇用された。ここで彼は着任して間もなく、ピアノ調律師のゴール親子を迎える。調律師はピアノが老朽化していることを伝えながら、そこでの調律作業を難なく終える。ところが、ワットは彼らが帰ったあと、この親子の存在をよく思い出すことが出来ない。ワットは彼らがピアノの調律をしたことも、何か職業や家族のことを話していたことも忘れ去って、物体と光、運動と静止、音と沈黙といったものの対話があったことだけを記憶に留めていた。ドアがノックされたのではないノックの音とか、閉じるが実際のところ閉じてはいないドアという奇妙な光景が、ワットの意識に絶えず到来する。彼はこれらの現象に対し、「ゴール親子の一件は、二人の男がピアノの調律にやって来たという最低限の意味さえたちまち失った⁽⁹⁾」と言う。

ピアノの調律に対する人間の言動は忘れ去られて、物の音や動きだけが記憶の中で反響する。なぜ人間とその行為は、消失してしまうのであろうか。ワットはこの一件以外にも、ノット氏のことではこうした意味の剥落^{はくらく}が頻繁に起こると言う。勿論、その場でピアノの調律やノット氏の行動が、理解できないという訳ではない。後になって、それらの言動が何のために為されたのか、行為の目的が彼には理解できないことになる。ピアノがあり、二人の人間がおり、何かの行動をする。ところが、誰のために、何の目的でそのような動作をするのかが、ワットの頭の中からは消え去ってしまう。人が行為をすることの意味が、彼には理解不能なのである。なぜ、そのようになるのか。彼はノット氏のもとへ来る

前は、町で住所不定の浮浪者のような生活をしていた。彼には人間の社会性の観念が欠如している。彼は社会の慣習や義務に拘束されないで、しかも出来れば労働もしないで、自由に生きたいと願っている。彼は社会秩序の中で理性を働かせながら、自我を犠牲にして生活を送ることに嫌悪を感じる。このような人間にとって、社会生活の意味など何の役にも立たないことになる。彼が自分の自由な意志にのっとって生きたいと望む以上、彼の中では人間の社会的に生存する意味が徐々に崩壊へ突き進む。

ウラジミールは、ゴドーがやって来ないのに虚しく待ったところで、そこには何の「真実」もないと言う。ゴドーとはウラジミールやエストラゴンにとって、絶対的な救世主なのであろうか。ウラジミールは多分、ゴドーに一度会っただけなのであろう。そのゴドーと確かな約束をした訳でもないのに、ゴドーが自分のところへ来訪すると考えている。ゴドーとはどんな人物なのかを、彼らが分かっているかどうかは疑問である。エストラゴンが自分をキリストと同一視しようとしたように、ゴドーとはキリストと呼ぶに相応しいような有徳の人物なのであろう。それ故に、浮浪者となって生存の意義を見出せないでいる彼らには、人生の知恵と生きる理由を授けてくれる人物こそが、ゴドーという名に値する存在なのであろう。だから、彼らは地上のどんな行為もゴドーの居ないところでは、真実性を欠いた無意味な事実としてしか受け取れないのである。

地上の真実はどこにあるのか。ゴドーの出現しない世界では、全ての行為が無意味に見える。またワットにおいては、社会的義務の中で生きることに強い拒否反応を示し、人間の生存の意味が彼の理性から崩落していく。彼らはこの地上にあって、どこに生きることの価値を見出せるのであろうか。ゴドーを待つ一日目、エストラゴンは昨晚はどこで眠ったのか聞かれて、「堀の中」だと答える。そして二日目、また同じ質問

に答える。

エストラゴン： ゆうべは、俺たちはここに居なかったって言ってるだろう。悪い夢でも見たんだ。

ウラジミール： すると、ゆうべはどこに居たとお前は言うんだ？

エストラゴン： 知らないさ。他のところだ。どこか他の世界さ。なにしろ空⁽¹⁰⁾き地はどこにでもあるからな。

エストラゴンとウラジミールは昼間、木の一本生えている場所へとゴドーに会いにやって来るが、夜になると、友人とはいえ別々の場所へ眠りに行く。浮浪者なので定まった宿泊地を持たないとはいえ、なぜ彼らは夜も一緒に過ごさないのか不思議に思えるけれども、それは兎も角として、エストラゴンは二日目の宿泊場所を明言することを避けようとする。それは「どこか他の世界」だと言う。勿論、地上のどこかであろうが、彼が宿泊地を答えようとし¹ないのは、地上のどこで眠ろうと、彼にとっては重要なことではないことを意味している。なぜなら、ゴドーに会うこと以外には、この地上に真実はないのであるから。ゴドーに会うために虚しく待つことになったこと自体にさえ、彼は意義を見出せないでいる。そうであれば、ゴドーと何の結びつきもない夜の眠りは、地上のどこであろうと彼の関心を引き起こさない。ゴドーが出現しなかった時点で、彼の一日はすべて終了してしまっていて、その後の時間は空白の時間として放置されるのである。

浮浪者にとって眠る場所がありさえすれば、それはどこでも構わない。眠れば、人は時々夢を見るであろう。それが悪夢である場合も少なくないだろうが、反対に救いの使者が突然出現することも稀ではない。このゴドーの戯曲の中で夢の話はあまり出てこないが、目を閉じた話なら見つけ出すことができる。その一番衝撃的なものは、富豪のポーズが二日

目に現れたとき、彼がいきなり盲人になっているという話である。なぜ彼が盲人になったのか、その理由は語られない。

ポゾー： あなた方は誰ですかね？

ウラジミール： 覚えてないんですか？

ポゾー： わしは盲だからね。

エストラゴン： その代わり、未来がお見通しかもしれないね？⁽¹¹⁾

ポゾーは目が見えない。エストラゴンはこの不幸に対して言うだろう、「その代わり、未来がお見通しかもしれないね」。目が見えないとはこの現実世界の事物が見えないということであって、人の心の中や未来の出来事に対しては想像力で見ることができる。目が見えないことによって人は物事の本質的な部分、つまり肉体の目からは隠されている部分を推察することが可能となる。だから、ポゾーが盲になったことは、ウラジミールがゴドーの出迎えを中止した場合に、「ひどい目に合わされる」という罰としての意味合いを象徴してもいるであろうが、一方で、一つの不幸が別の幸運を引き出すという逆説性をも含んでいる。ベケットはこの戯曲の最初の方で、キリストと一緒に磔^{たづけい}刑にあった二人の泥棒の話を、ウラジミールに語らせている。一人の泥棒は地獄行きとなり、もう一人は救われたと、四人の福音者のうちの一人だけが伝えていると言う。福音者に話の重点は置かれているが、それは兎も角として、悪事を働いた人間でも半分の確率で救われることがあると説いている。この論理は恐らくポゾーが盲人になったという不運が、かえって彼の洞察力を高めるという逆説に結びついていることを意味する。

半分は不運だが、半分は未来への予見である。ポゾーの盲は見えない世界を見るための恩寵である。盲人であることは神へと結ばれる絆である。目を閉じよという指示は、別のもう一箇所のところでも発せられる。

エストラゴンとウラジミールは暇つぶしに木の真似をして、片足で立ち両手を広げてみる。このとき突然に、エストラゴンは神について言及する。

エストラゴン： 神様は俺を見てると思うかい？

ウラジミール： 目をつぶらなくちゃいけない。⁽¹²⁾

自分を見ている神様を見るためには目をつぶらなければならないという訳で、肉体の目は現実のものを見るには適しているが、精神界の無形の存在を見るためには、目を閉じて心の目で見なければならない。心はその姿を明らかにしない神の言葉を聞くであろう。その言葉の背後には神が宿っている。だから、肉体の目でこれを見ようとすれば、ちょうど事物を逆光から見るようなもので、目がくらんで何も見えなくなる。『新約聖書』の「ローマ人への手紙」は言う、「神の不可見性すなわちその永遠の力と神性は、世の創造の時以来、そのみ業^{わざ}について考える人にとって見えるものである⁽¹³⁾」。「神の不可見性」、つまり神とは見えざるものであって、神のみ業を考える時のみ各自の精神の中に捉えることができる。しかも、「ヨブの書」が説く通り、神は人の「苦しみによって救われる」のであるから、安易な瞑想にひたるだけでは何も見えてこない。苦難の果てに目を閉じて神に救いを請う、この時にこそ神の姿が現出するのである。

エストラゴンとウラジミールの二人は確かに苦しんでいる。彼らは直接的な理由は明らかにしないまま、なぜか自殺願望に取り付かれている。二人はゴドーというよく知らない人物を待つ。ゴドーは彼らにとって救世主となる存在なのであるか。それは二人にとっても分からない。彼らはゴドーと名のる人物に、自分たちの救いの道が開かれなかと微かな期待を抱いているだけである。彼らはそのために木のある場所へとやって来るのだが、一日目も二日目もゴドーなる人物は現れない。彼らの

待つ行為は徒労と化すのであろうか。待つことは聖書に言う苦しみを積む行為に値するのだろうか。それに対する確かな答えはない。彼らはゴドーを待つことに意義を見出せなくなる。待つことに「真実がある」のかどうかと、問わざるをえない。

待つことは真実を呼び寄せる、そう信じるのが可能なら、エストラゴンとウラジミールは後悔しないで、明日もゴドーを待つことができよう。ところが、ゴドーとは神なのかキリストなのか、それとも死なのか、はたまた単なる羊飼いなのか、それを彼らは見極めることが許されない。恩寵にも等しい機運に向かって期待を高めることは可能だが、果たしてそれは本当に実現するのか。それを知ることが、地上の人間には秘密の中に隠されているのである。彼らには待つことが真実を呼び寄せることであり、待つことによって生存の苦しみを体験し、少しでも人間の真の救済へと近づくことを祈願するしか方法はない。しかし、一日ごとの徒労に終わる期待は、彼らを不安へと駆り立てる。この不安に対処する方法は何か。自分の物語を書こうとするモロイなら、こう言うことも出来よう。

というのも、何も知らないことは何でもないことだからだ、何も知りたいと思わないことも同じことだ、しかし、何も知り得ないこと、何も知り得ないと知っていること、そこからあまり好奇心を持たない探索者の魂の中に、平和が訪れるのだ。⁽¹⁴⁾

「何も知り得ないと知っていることで、魂に平和が訪れる」、確かに何も知り得ないという不可知論に到達できるなら、安心立命の境地に立つことも可能である。モロイのように一時は自分の名前さえ忘れてしまい、そして今は過去を振り返って物語を書き留めようと追懷にひたる人物であるなら、何も知り得ぬという全面的な否定にいたる思考も許されよう。

ところが、地上の生存に不安を覚え、名前だけのゴドーという存在に救世主の到来を待望する人物にとって、無私無欲の仙人のような生活が実現できるであろうか。エストラゴンとウラジミールはまだ地上において救済を願い、それを虚しく待っている。待つ行為に疲労し、絶望へと向かおうとしている。待機に真実を見出せない人間に、またしても明日ともなれば不安が訪れる。苦しみを重ねれば、真実が見出せるのだろうか。「この途方もない混沌の中で唯一の明らかなこと、それは我々がゴドーの来るのを待っているということだ⁽¹⁵⁾」と、言うけれど。

三、死の願望

ウラジミールとエストラゴンの二人はゴドーを待ちながら、取り留めない会話で時間をつぶす。エストラゴンの履いている靴は彼の足には小さすぎて、痛みをもたらす。彼はそれを脱いだりして、その痛みを相手のウラジミールに訴えようとする。このとき彼はウラジミールのズボンの前のボタンが外れていることに気づき、「お前ときたら、いつも最後の瞬間まで我慢しているんだから」と言う。この言葉を受けて、ウラジミールは「最後の瞬間……。それは長くかかる、しかし、きっと素晴らしい⁽¹⁶⁾」と応じる。彼らの会話は一人が話した何気ない言葉にもう一人が反応して、別の話題についての意味内容へと飛躍する。この場合も、トイレを最後まで我慢している話を、ウラジミールは死による最後の瞬間へと転換する。言葉の意味内容の転換は、後者の人間がそのことに潜在的に興味を抱いていることを示唆する。彼は前の意味内容を切断して、突発的に新しい意味を付与するのであるから、新しく捉えられた意味は、彼の意識の中で強い関心の的となっていることになる。

死による最後の瞬間、これに二人は強い願望を抱いている。川で投身

自殺を図ったことや、木の枝で縊死を試みたら枝が折れて重い人間は助かり、軽い人間は死へと到るという推論を行ったように、自殺への誘惑は彼らに付きまとう。この「最後の瞬間」の話のあと、会話は聖書の中で泥棒二人のうちの一人は救われたという話になり、こう続く。

ウラジミール： 悔い改めることにしたら、どうかな？

エストラゴン： 何を？

ウラジミール： そうだな……。そんな込みいった話はどうでもよからう。

エストラゴン： 生まれたこと(17)をか？

死を願望する人間は、生の根本に帰ることへと思いをはせる。つまり、誕生自体をくい止めることが出来ていたなら、死ぬことを願う必要もなかったという結論へと到る。しかし、この世に生まれてしまったことを、どう悔い改められると言うのであろう。人間として誕生したことは本人の責任ではない。自分の責任でないことを改悛することなど不可能であると考えられるが、なぜか人の思念の中では誕生したという事実を悔い改めて、生存に到る前の段階へと回帰することが可能であるように思える。そして、人間として生まれた現在の罪ある自分を捨象して、罪なき清心なる人間へと生まれ変われると考えるのである。だから、生まれたことを悔い改めようとする人間は、単に誕生以前に帰ろうとするだけでなく、今の苦しみを取り払った新しい生へと復帰することを願っている。死を通して新しい生へと再び誕生することを、希求しているのである。

生まれたことを悔い改めることはできる。しかし、それは死ぬことではない。改悛しようとする人間は死を選ぶことによってではなく、新たな生を獲得することによってそれを叶えようとする。死へと到るなら、わざわざ改悛してみる必要などないであろう。改悛とは肉体とするもの

ではなく、人の精神の中で行うものである。精神的に死を選び取って、新しい人間として復活する。ここにこそ改悛という精神的な行為の意義がある。改悛は精神の中で生き直すことを教えるであろう。ところが、ウラジミールとエストラゴンの二人がこのように「生まれたことを悔い改める」と言葉にして言ってみたところで、彼らが改悛への積極的な行動を実行できる訳ではない。改悛への思いはあっても、彼らが出来ることは過去の怠惰な生活への反省程度であろう。彼らはどんな善行を積んだのか。どんな神への祈りを捧げたのか。二人は特別に信仰が厚かった訳ではない。彼らは聖書を軽く読んだ程度であり、反省するとはいても、人生に生きる目的を持ってない生存者の不安に突き当たるだけである。二人は木の葉のそよぎを聞いて、こう話す。

ウラジミール： それは何を言ってるのかな？

エストラゴン： 自分たちの一生を話している。

ウラジミール： 生きたというだけでは十分じゃない。

エストラゴン： 生きたことを話さなければ。

ウラジミール： 死んだだけでは十分じゃない。

エストラゴン： ああ足り⁽¹⁸⁾ない。

まずウラジミールが、「生きたというだけでは十分じゃない」と言う。それに対するエストラゴンの返事は、「生きたことを話さなければ」となる。なぜ、生きたことを言葉に出して話す必要があるのか。これは第一に二人の会話が木のざわめきを話題にしているので、その葉音を「話す」と例えた訳である。しかし、これを人間に置き換えて解釈すると、人生を言葉で語ってみることは重要だとなる。人間は日常生活の中で生きている。そこには欲望があり満足がある。また、挫折があり後悔がある。人生の経験を言葉にすることは、それらを客観的に考察することで

ある。言葉による二度目の経験は、人間に生きたことの意味付けを与えるであろう。それが真に生きる価値のあったものなのか、また反対に、地獄に堕ちるに相応しい悪徳まみれの人生であったのか。だから、人生に救いを求めようと願う人間は、言葉によってそれが証明されることを願う。モロイは言うだろう、「私はいつもしゃべり過ぎるか、しゃべり足りないかで、私みたいに真実に取りつかれた者には辛いことなのだ」。⁽¹⁹⁾「真実に取りつかれた」人間は、自分の人生が生きるに値したものなのかどうか判断するために、自分の経験を言葉に置き換えて評価の対象とする。その時、実際の経験と言葉が正しく整合しているかどうかの判断は困難を伴う。しかし、多少の誤差があるとしても、人生評価の判断を仰ぐ以上、言葉以外の手段に頼ることは考えられない。

人は生きただけでは十分でない。言葉によって、それが真実に値することの証をする必要がある。それでは、「死んだだけでは十分じゃない」のはどういう理由によるのか。これに対する返事を、エストラゴンを持ち合わせない。なぜ返事が返せないのか。勿論、死んで更にどうすべきなのか分からないからである。人はいつかは寿命が来て死ぬ。また病気や事故で若くして死ぬこともある。そして外的な理由によるだけでなく、自らの意志で自死することもある。エストラゴンとウラジミールは、自殺への誘惑に取りつかれている。自ら選んだ死であれば、死として十分に納得のいくものになるのであろうか。それは自然死よりは死について真剣に考えた結果であるかもしれないが、その自死も病気や経済的理由、また人間関係を苦にした外的理由による場合も少なくない。こうした外的理由でなく、死の世界を理想とする死に方であれば、満足のいくものであるのだろうか。モロイは言う。

そして、私個人に関する限り、私はいつも死よりは、というより死刑よりは奴隷である方を選んだ。というのも、死は私が満足に思い描

けない条件であって、善悪の貸借対照表に正式に加えられないものだからである。⁽²⁾

人は死の誘惑に駆られる。しかし、死が一体どのようなものなのか、正しく思い描くことは出来ない。他人の死であれば、その死の瞬間に立ち会うことができる。しかし、その死と化した人物を目の前に目撃するとしても、肉体とは別の死の世界とは何であるのか、十分な確証を持つには到らない。死の世界では生前の現実世界で経験した苦痛や不安は消滅して、心の安らぎをもたらす絶対的な至福が存在しているのか。それとも、生前の罪に対する厳しい地獄の世界が広がっているのか。それらを自らの思慮で判断することには躊躇が伴う。だから、自分の死が十全な死に値するような死であるのか、誰も自らの生前の生き様だけで判断することには確信が持てないのである。例え臨終に際し自らの罪を懺悔^{ざんげ}するとしても、死の世界において何が待ち構えているのか、人の不安を鎮めることは容易ではなからう。

ベケットと同時代の実存主義作家アルベール・カミュは『シジフォスの神話』の中で、哲学にとっての根本問題は自殺について問うことであると言う。

不条理は死を命じるが、この問題こそ、無関心な精神のあらゆる思考方法と気晴らしから離れて、他の問題よりもまず先に考察しなければならないことである。[……] 自殺についての考察は、私にとって関心のある唯一の問題を提示する機会を与えてくれる。すなわち、死にまでいたる論理は存在するか、ということだ。⁽²⁾

人間の条件を拒否して生きようとする人間は、自らの生存に関して問いを発する、人生は生きるに値するか否か。自らの生を問うことは、自

分の曖昧にしてきた人生を明るみに持ち出して審判を行うことであるから、悪の部分が判明する。彼は人生は生きるに値しないとして、否定の論理を強化するであろう。そして、神の救いさえも拒否して人間の条件に反抗することが、かえって彼の生を意義あるものだとする判断へと進む。しかし、否定の精神はいずれ限界に達し、今度は自分の命を自ら進んで絶つという自殺への誘惑にさらされる。しかし、反抗の最終的な手段として自殺を選ぶとしても、真に「死にまでいたる論理」が成立するのであるのか。キリスト教は神から授かった命を、人間が自由に放棄することを禁じた。この規律に対抗することは、彼の生存を意義あるものにするのか。死を自ら選択することは個人を崇高な精神へと導くが、果たして死を選ぶという不条理は、人間にとって論理的に正義であるのか、カミュは問おうとする。

ベケットはたとえ自ら選んだ自殺であるとしても、「死んだだけでは十分じゃない」と言う。「ヨブの書」が言うように、死を前にしての彼の苦悩が十分でないために、エストラゴンとウラジミールの二人も、死による神の救いを得られないと考えるのであろうか。彼らはゴドーという救いを待っている。その者が本当に救世主であるのかどうかは分からない。ただ彼らは、人生において生きることの意義を見出せないでいる。今いる地上の世界は彼らに安らぎをもたらさない。彼らは夜に眠る家屋も所有せず、この地上にありながら、その地上ではない別世界に眠りの場所を確保しようとする。浮浪者とは何ゆえに生活の規範となる労働を拒否して、不安定な放浪に身を置くのか。彼らの地上における無為は、救世主を迎えるための精神的準備であるのだろうか。生活を支える労働に拘束されていては、人間が生存することの意味を十全に考えることは出来ない。労働から自由になってこそ、精神はその本来あるべき真実の姿を捉えられるであろう。救い主をひたすら無為に待つところにこそ、「最後の瞬間」への邂逅^{かいこう}が約束されている。

死は人生に決着を付けることではない。死は人に肉体上の消滅をもたらすが、精神までも滅びさせはしないであろう。死ぬことは、それで全てが無に帰すことではない。キリスト教徒なら土に帰って、再び復活することを期待するであろう。一度死に身をさらした人間はキリストが復活を果たしたように、不死身となってよみがえるであろう。ベケットの主人公マロウンは自分の物語を語りながら、こう言う。「こんな言い方をしてよければ、私は死の中へ生まれようとしているところだ。そんなふうに思える」²³。死を迎えながらも、そこで新たな生へと転身する。この新生は何を意味しているのか。マロウンはキリストのように神の国を目指して、人類愛への教を説こうとする訳ではない。彼には精神的自由の中で、真実と思える生を生きられれば十分である。そのために彼は、自分の死の中に生きようと思うのである。エストラゴンやウラジミールなら、死によって何を望むと言うのであろうか。死は人に訪れる。自殺によってそれを自ら達成することもできる。しかし、死が肉体的な消滅に終わってしまったのでは、人間の真実はどこで達成されるのか。

エストラゴンとウラジミールは、生まれたことを悔い改めたらどうかと問う。生まれてしまった事実を、どうやって悔い改めると言うのであろう。生まれたことを誕生以前に戻すことは出来ない。生まれたことを反省して有意義な人生を送ろうとすることも、きっと改悛の一つではあろう。それまでの不安で生きがいのない生活を捨てて、希望の持てる真の人生を送るのである。しかし、この真の人生とは一体何なのかと問おうとすると、答えは見つからない。生活のために働くことではない。それなら、神のために働くことなのか。それは教会の聖職者になることなのか。それも一つの方法ではあろう。しかし、人間の全てがそれを望める訳ではない。俗世に住む人間は、どうしたら真の生活を持てるのか。ゴドーを待つことが真実への道から外れているとすれば、それは人間にとって苦しみはまだ不十分ということなのか。「明日には首をつろう。

ゴドーが来ない限り」⁽²³⁾と、二人は言う。しかし、明日になれば、明日とは今日に変わってしまう。明日とは彼らにとって、永遠に完結しない一日である。ゴドーが来ない、それは死への導きではなく、死の真実を待つことへの確証なのである。

注

- (1) サミュエル・ベケット、『ゴドーを待ちながら』、Samuel Beckett, *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit, 1952, p. 17
- (2) 前掲書、p. 71
- (3) 前掲書、p. 132
- (4) 前掲書、p. 73
- (5) 「ヨブの書」、「旧約聖書」、「聖書」、フェデリコ・バルバロ訳、講談社、1980年、901頁
- (6) 『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 210
- (7) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 128
- (8) 前掲書、p. 43
- (9) 『ワット』、*Watt*, p. 74
- (10) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 92
- (11) 前掲書、p. 119
- (12) 前掲書、p. 108
- (13) 「ローマ人への手紙」、「新約聖書」、「聖書」、233頁
- (14) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 96
- (15) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 112
- (16) 前掲書、pp. 11-12
- (17) 前掲書、p. 13
- (18) 前掲書、p. 88
- (19) 『モロイ』、*Molloy*, p. 50
- (20) 前掲書、p. 103
- (21) アルベール・カミュ、『シジフオスの神話』、Albert Camus, *Le Mythe de Sisyphe, Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2006, p. 225
- (22) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 183
- (23) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 133